

2021年度成果報告書  
子どもの孤立を防ぐ居場所を拠点とした  
地域連携の包摂的支援事業

2021年度成果報告書  
子どもの孤立を防ぐ居場所を拠点とした地域連携の包摂的支援事業  
(令和3年度 独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業)

発行日：2022年3月  
発行者：特定非営利活動法人 サンカクシャ  
〒170-0012 東京都豊島区上池袋4-35-12 3階  
電話：03-6905-8287  
<https://www.sankakusha.or.jp/>

特定非営利活動法人 サンカクシャ

# INTRODUCTION

## はじめに

2019年5月に文京区での活動に取り組み始め、もうすぐ3年を迎えるようとしている。

この3年の間、本当にたくさんの人々に支えられ、これまで活動を続けることができた。

義務教育終了後、支援が途切れてしまい孤立しやすい若者に安心できる人や場を作り、自立をサポートすることをテーマに活動してきたが、孤立しやすい若者と出会うこと、つながり続けること、支援を届けることは簡単なことではなかった。

数字だけ見たら、小さく見える「1」にも、壮絶な苦しみや葛藤、難しさがあり、その1人を支えていくだけでも、たくさん的人々が汗を流し、少し無理をし、支えてなんとか生きていくことをつないでいる。

この3年間で、たくさんの人々を巻き込み、たくさんの人々に迷惑をかけた。しかし、関わっていただいた方々は皆、あたたかく許容してくれ、応援してくれ、一緒に活動を続けてくれた。

若者を支えようとこんなにも動いてくれる方々がいるんだと、私たちが一番励まされたかもしれない。

その地域の人の温かさを十分に若者に伝えることができたか、その温かさをもっと多くの若者に届けることができたかと言われると、十分ではなかったと感じている。

しかし、地域に根ざし、泥臭く活動を地道に積み上げてきて、得られたネットワークは、助成期間が終わってもなくなるものではなく、これからも維持し、発展していくかなければと使命のように感じている。

もちろん、お金をどう集めるか、どう活動を維持していくか、どう活動を広げていくかなど課題はたくさんあるが、地域の人たちとこれまで一緒に汗を流した積み重ねがあるので、たくさんの人の力を借りて活動を維持、発展させていきたい。

小手先の色々なテクニックやノウハウはあると思うが、地域の人たちと血の通ったつながりこそが、若者支援においては一番大切なかもしれないと思っている。

まだまだ課題はたくさんあり、これから改善していく点がたくさんあるが、3年間の地道な歩みを報告書にして、若者の現状、若者を支える担い手の状態や葛藤、活動の実績などを多くの人に伝えることができればと思い、スタッフ一同文章にまとめた。

活動に携わっていただいた方々、応援していただいた方々に感謝の気持ちと活動の様子を少しでもわかりやすく届けられたらと思っている。

特定非営利活動法人サンカクシャ  
代表理事 荒井佑介

# CONTENTS

## 目次

- 
- 1 事業背景・実施体制
  - 3 地域連携による孤立する若者へのアウトリーチ
  - 5 居場所支援の概要
  - 7 3年間の居場所支援における若者の変化
  - 9 2021年度のボランティア人材育成
  - 10 新指標開発の理由・新指標の内容
  - 12 新指標を用いた事業の成果と示唆
  - 14 地域との連携・行政との協働
  - 16 3年間の変化で起こせなかつたこと・団体としての葛藤や改善点
  - 17 次年度以降の展望
  - 19 連携機関・地域の方々からのコメント
  - 21 伴走者コメント
  - 24 沿革

日本では以前から子ども・若者と社会とのつながりの希薄化が問題視されてきた。それは、義務教育期においては不登校、義務教育以降のひきこもり・若年無業といった形で表面化していたが、昨今の新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、その傾向はさらに顕著になっているのが実情である。

サンカクシャが活動する文京区では、令和元年度の不登校児童は小学校で79名、中学校で107名で全国平均と比較しても高い割合となっている。また、義務教育終了後の若者で困難に直面している者に関する統計資料等はないが、全国的な傾向として、若者の約1.5%がひきこもり状態にあり、約2%は若年無業状態にあると言われていることから、文京区内にも困難を抱えながら孤立している若者が1,000人から2,000人程度いると考えられる。

このような状況に対して、文京区においては、義務教育期の子どもに対しては、各学校、教育センター、子ども家庭支援センター等の支援機関が連携してサポートする仕組みがある程度整備されている。一方、中学卒業後に困難に直面した若者に対しては、教育センターの総合相談室などの支援機関はあるものの、18歳未満の子ども・若者を対象者としていたり、認知度の低さといった課題を抱えていたりと、子ども・若者が求める支援を十分に提供できているとは言い難い状況にある。

子ども・若者が抱える困難は、様々な要因が関係して複雑化しているケースが多く、そういうケースが地域の支援リソースと繋がれない状態が続くと、当事者およびその家族の孤立は深まっていく。その結果として、家庭内不和や経済状況の悪化、不安症や精神疾患、二次障害発症といったさらなる悩みを抱え込むことにもなりかねない。悩みを抱えている若者に地域が歩みより、その中から若者が必要としているリソースを持っている大人と繋がっていく、「若者が社会の中で自立して生活していくために、支援の目標をどこに置くのか、若者の成長を把握するための枠組みを構築する」という2つの課題に対応する取組を行ってきた。

また、支援をしていく上でたとえ支援を行ったとしても、

その支援によって若者がなりたい姿になれているのか、成長できているのかを判断するための枠組みがないという問題もある。若者が社会の中で自立して生活していくために、支援の目標をどこに置くのか、若者の成長を把握するための枠組みを構築することが重要と考えられる。

#### ▶ サンカクシャの事業概要と本事業における取組概要

サンカクシャでは文京区や豊島区を中心に、年齢や制度の枠組みを超えて、貧困、不適切な養育、家族関係の希薄、不登校、コミュニケーション面の課題等の理由により孤立しがちな若者に対する支援を行ってきた。活動内容はアウトリーチ支援、居場所支援、就労・学習支援など多岐にわたっている。これらの活動を通じて、若者が自尊心を高め自己を大切にする力を獲得した上で、自分の将来やその後の進路に対しての意欲の向上を目指してきた。活動を通じて、若者本人が「見守ってほしいと思える大人」と出会い、その人とのかかわりの中で「これをやってみたい」と思えることを見つけることで、「自分のやりたいことに邁進していく状態」に成長していくことをサポートしている。子ども・若者がそのような状態に成長することができれば、支援者からの介入がなくとも、若者が困難と出会った際、自分自身の力で「調べる」「相談する」「人に頼る」ことができ、若者自身が見つけたコミュニティの中で、困難を乗り越えていくことができると考えている。

本事業では、3年間の活動を通じて、前述した「悩みを抱えている若者に地域が歩みより、その中から若者が必要としているリソースを持っている大人と繋がっていく」「若者が社会の中で自立して生活していくために、支援の目標をどこに置くのか、若者の成長を把握するための枠組みを構築する」という2つの課題に対応する取組を行ってきた。具体的な取組として、地域と連携し、義務教育修了後に孤立しやすい不登校状態にある子ども・若者に対して、家庭訪問等のアウトリーチや居場所づくり、伴走支援等の活動を展開してきた。また、これらの取組を通じて、子ども・若者が社会とつながり、自立するまでの期間を多様な大人で見守り続けられる仕組みを構築してきた。加えて、そういう

た支援の取組が当事者である子ども・若者にとってどのよ

うな意味があったのか、自分たちの活動をより改善していく余地があるかどうかを振り返るための評価指標の構築に取り組んだ。

初年度は、実施主体を文京区社会福祉協議会とし、サンカクシャと文京区教育センターや地域の子ども若者支援団体との連携といった、支援をしていく上での基盤づくりに注力した。活動の状況や、若者の様子を文京区教育センター、文京区社会福祉協議会、地域関係団体に伝えながら共有することで、自団体ができることの明確化と若者支援の重要性、多様性、必要性についての意識を共有し、文京区における若者支援ネットワークの拡充に努めた。

2年目は実施主体をサンカクシャとし、困難を抱え孤立しやすい子ども・若者とつながるためのSNSを活用したアウトリーチ手法の開発、つながった後の個別支援や居場所の体制づくり、そして、大学などと連携し、伴走支援者を増やすための人材育成に取り組んだ。また、若者を見守り、支えることを地域ぐるみで行えるよう、地域町内会活動に参加する等、地域の生活者の方々との交流する機会をつくることで、地域の方々に若者のことをより理解してもらえるような関係づくりを進めた。加えて、支援の内容を振り返り、支援の質を高めていくための評価指標の開発に取り組んだ。

3年目となる今年度は、2年目までの取組を継続及び深化させることを目指し、アウトリーチ、居場所、伴走支援といったそれぞれの活動において、支援の質を高めることを目指してきた。また、若者支援の必要性及び認知度を高めていくために、行政機関、地域で活動する団体や個人との連携のさらなる強化に尽力した。それぞれの活動が軌道に乗り、活動の規模が拡大してきたのに伴い、活動を手伝ってくれるボランティア募集を行い、居場所活動や個別対応においてボランティアが若者の伴走支援を継続し、子ども・若者に彼らが求める支援を提供できる体制を整えた。加えて、若者の変化の把握と人材育成のために、取組が若者と地域に与える影響の言語化に注力した。評価指標についても、自己評価主体の運用方法から、子ども・若者からのフィードバックを得るための視点を取り入れ、評価手法の改善に取り組んだ。

3年間の取組を振り返ると、特に事業2年目および3年目は、新型コロナウイルスの感染防止の観点から、様々な活動が当初の想定と異なる形で実施せざるを得なかつたことが、事業を進めていく上で大きな転機となつた。

アウトリーチは直接会ってコミュニケーションすることが難しくなり、SNS等を活用したオンラインベースのやり取りに切り替え、居場所も感染防止対策を徹底したうえで開放時間の短縮などを余儀なくされた。地域との交流機会も大幅に制限せざるを得ず、当初想定していた活動を大きく変更して子ども・若者をサポートすることになった。しかし一方で、活動の一部をオンラインに切り替えることで、これまで出会うことができなかつた子ども・若者との接点ができたり、オンラインならではの関係構築の機会を見つけることができ、団体の活動として広がりを持たせることができたという収穫もあつた。一連の取組で得られた経験を、今後の活動にも活かしていきたい。

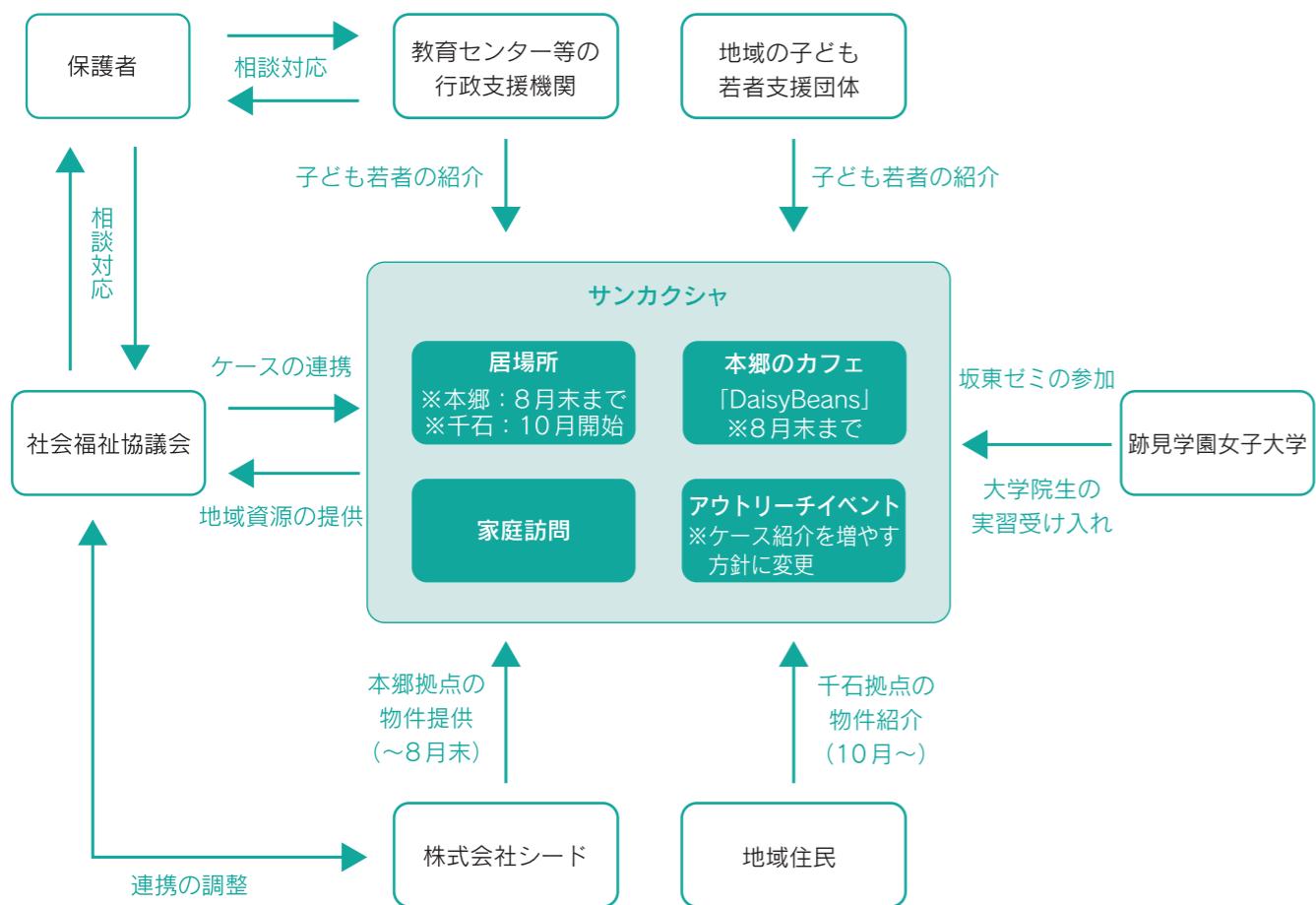


### 地域連携による孤立する若者へのアウトリーチ

事業2年目に引き続き、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、困難を抱える子ども・若者へのアウトリーチの方法自体の変更に迫られた3年目であった。

本事業は初年度から、文京区教育センター等の行政機関が把握している不登校等もしくは地域で孤立するリスクのある児童・生徒等にリーチすることを目的として実施してきた。義務教育が終了するタイミングで公的支援が途切れやすい傾向にあるため、義務教育中に教育センター等に支援が必要な子ども若者を紹介していただき、義務教育終了後もサンカクシャで伴走できる体制を構築してきた。

#### 事業の実施体制



しかしながら、サンカクシャが支援する若者層は、基本的に上記のような行政機関や地域で活動する支援団体からの紹介を受けてつながることが主であるが、今年度の上半期は、支援する若者数に伸び悩んでいた。その主な要因としては、サンカクシャや関係職員から団体自体が何をやっているか、どのように若者と関わっているかを地域等に向けた対外的な発信がうまくできていなかつたことや担当職員の交代頻度の高いことから、サンカクシャに若者をつないでも、継続的な関わりは期待できないのではないかという認識を持たれてしまっていることが背景にあると思われる。

そこで、今年度は複数の職員で役割分担をして、文京区内の各団体や行政機関、学校と定期的に会議等を行ったり、共催でイベント企画を行うなど、担当者間でも組織間としてもコミュニケーションを継続させつつ深められるよう努めてきた。

具体的な流れとしては、他の支援団体が若者支援の社会資源が必要な孤立した若者と繋がり、サンカクシャでケース対応が出来るかを支援団体の担当者と面談を行い、出来ること、支援の方向性などを協議し、連携の手はずを整えた。

その後、紹介元の支援団体担当者をはじめて対象の若者と実際に会い、サンカクシャ職員が若者本人のニーズや情報を把握し、居場所段階へ移行するために、「信頼関係の構築」を行うことで、「信頼できる人がいるからもう少し大人数でも人に会える」という状態に進めていくように、今年度に紹介されたケース1人ひとりに対して行っていった。

紹介ケースの中には家庭訪問後に、感染症の懸念から居場所には来らずに、ZOOMやサンカクシャ公式LINEを用いて、オンラインゲームや英会話教室といった若者本人の興味関心にあわせてやり取りを重ねることで、繋がりを保つことができたケースも多い。オンラインでのアウトリーチ手法を開発できたことは、今の社会状況を踏まえて、直接会うことによる懸念がある若者層と関係構築しやすくなることが期待される。

これらの結果として、2022年1月末時点での支援実績は、個別支援対象者が18名となっている。主とする関わ

り方の内訳は、家庭訪問3名、オンライン4名、居場所活用11名である。

この支援実績には、「文京区でサンカクシャとして求められていること・できること」を念頭に置き、文京区の地域特性や活動する団体・個人との繋がりを意識して、コミュニケーションの努力を続けてきた結果だといえる。1月末現在、教育センター、社会福祉協議会、子ども家庭支援センター、区内中学校、地域で活動する他団体、地区民生委員・児童民生委員、保護者が関わったケース依頼相談が少しづつ増加している。

翌年度以降も新規ケースの紹介件数を増やしつつ、文京区内の若者たちの義務教育終了後を支えられる仕組みをつくりていく必要性を感じている。

#### ▼社会福祉協議会、子ども家庭支援センターと連携して対応したケース

教育熱心な家庭の方向性から母子関係の悪化に繋がり、学習意欲の低下と、安定した関係性をもつた人の繋がりがなく、特定のゲームだけに関心を持つ若者であった。

1対1の関係性づくりを重視し、特定のゲームの話題と一緒に楽しむことや、家庭で感じたことの話を受容して聞くことを行うことで、関係構築に努めた。

その後、関係構築した職員にもっと会いたいという気持ちから、居場所開放日に参加し、夕食づくりと一緒にすることや、特定のゲーム以外で同年代の若者と交流を深める等、様々な活動に参加していました。

家庭では、サンカクシャであったことを話すなど、母子交流の機会も増え、保護者も喜びを伝えてくれている。こうした関わりを通じて母子関係改善の兆しも見られています。

## 居場所支援の概要

本事業では、3年間の取り組みを通じて、地域の若者に対して居場所を提供してきた。

若者にとっての居場所の存在は、彼らが孤立せずに生きていく上で重要であることは言うまでもない。また、居場所と思える場所の多さが、子ども・若者の前向きな自己認識と相関がある事が内閣府の子ども・若者白書の中でも示唆されている。

子ども・若者にとっての居場所は自宅や学校であることが多いが、中にはそういった場所に居心地の良さを感じられない層がいる。そのような子ども・若者は日々の生活で安心感を得られず、孤立してしまいがちである。

文京区でも、居場所関連の活動団体として、子ども食堂や宅食サービス等、子ども世代に対する支援や、地域の学習支援団体や中高生を対象とした挑戦することを応援する団体が活動している。その一方で、若者に対する居場所を提供している団体や活動は十分とは言えないのが実情である。若者に対する居場所支援が十分ではない背景には、若者が孤立を深め「引きこもり」等の明確な社会課題になってはじめて認識され、その予防的アプローチの必要性が十分に認識されていないという課題もあると考えられる。

そこでサンカクシャでは、文京区内に居場所を開設し、そこで若者が「在りたい姿でいられ、やりたいことがやれる」機会を提供してきた。また、地域との交流イベントを企画し、若者と地域で生活する住民とがコミュニケーションする機会をつくり、居場所を利用している若者がやりたいことを実現できるよう地域のラジオ局と連携する等、若者が地域と繋がれるようサポートを行った。

特にサンカクシャが運営する居場所では、「受験等の目的に向けた学習支援が一段落したもの、継続的に見守りが望まれる若者(年齢の切れ目)」や「挑戦すること等が難しい段階(意欲がない等)の若者」といった、既存の支援の隙間にいる若者を主な利用者として想定した。

居場所として文京区内のビルの1・2階をリノベーションし、もともと喫茶店であった1階は、働くことに興味を持つ若者が実際に飲食業の経験を積むことができ、地域の生活者が気軽に利用できるカフェとして運営した。また、2階は若者がリラックスして滞在することができる空間として整備した。

居場所では、のびのびと過ごしてもらいつつ、興味が湧いた時に料理やお客様とのやり取りといった経験を積んだり、イベント等へ参加したりすること等を通して、自己肯定感や自己効力感を育めるような活動機会を提供した。また、居場所で過ごす時間の中で、サンカクシャの職員やボランティアといった大人、同年代の若者との交流する経験を積み、少しずつ社会性を獲得していくような交流機会を提供してきた。そういった体験を通じて、自分の行動に自信を獲得した段階で、今後社会に出ていくうえで求められる責任感や一般的なマナー等、少し負荷を感じる活動に参加してもらい、そこで出会う大人との交流を通じて「見守ってほしいと思える大人」との関係性をつくっていけるようサポートを行ってきた。

文京区本郷の居場所はビル所有者との契約上2021年8月で終了し、その後は地域の方の紹介によって同年10月から文京区千石に拠点を移すこととなった。文京区の若者が抱える課題について、地域の方々にも共有しつつ、様々に協力いただきながら居場所運営を継続させることができている。

こういった活動の中で、若者が「自分が在りたい姿でいいんだ、やりたいことをやりたいと言ってもいいんだ」という気持ちになれ、新しい行動に挑戦していく姿が随所で見られ、居場所支援という活動が一定の成果を挙げたことを確認できた。今後は居場所の活動で得られた知見を活かしながら、若者が社会参画していくことをさらに後押ししていく活動に発展させていきたい。



居場所での様子。職員と若者が一緒にゲームをしている。

### ■インターネットラジオ OTTAVAとの連携

2021年4月からサンカクシャ居場所を継続的に利用するようになったある若者は、職員や他の若者たちと交流することを通して、「将来は声優になりたい」という目標を語っていたことがあり、文京区にあるインターネットラジオOTTAVAのラジオ収録が行われている場所への訪問体験の機会をつくった。この機会を通して、若者は今後自分のやりたいことに邁進していくイメージを広げること、そのイメージを広げる際は職員をはじめ居場所にいる大人に相談できると感じることができたと考える。

その他に、OTTAVA公式Youtubeチャンネルを通して、「文京区」をテーマに若者が動画制作を行う機会を提供していただいた。文京区の飲食店や八百屋等を訪問し、動画や写真の撮影、インタビュー、何気ない会話を通じて、地域で活動する大人と出会い、交流する中で、若者たちは文京区という地域について少しづつ知り、地域の大人を少し身近な存在として認識することができることに今後繋がっていくと感じる。



## 3年間の居場所支援における若者の変化

本事業における居場所支援として、拠点での活動や地域との交流等を通じて、若者の様々な成長を目の当たりにしてきた。利用者や職員の誕生日会を毎月実施してきたこともその一例として挙げられる。誕生日のお祝いを毎月行うことで、自分の誕生日を祝われた若者が、各々のペースで、ケーキ作り、部屋の装飾、メッセージカード等、その人が喜ぶことを考えて行動するようになった。自分の誕生日を祝われた時に味わった気持ちを、他の人の誕生日に、相手にも感じてもらえるように何かしてあげたい、という思いを抱くようになったことは、居場所利用当初には見られなかつた行動であり、他者との関係から自分なりに考えて行動するようになった若者の成長の一つの表れといえるであろう。



居場所での誕生日会の様子

また、支援者以外の大人との関係構築という面では、東京都美術館のボランティアと連携し、東京藝術大学の学生とのオンライン交流、個展見学、対面交流イベントを2021年9月・10月と2022年1月に実施した。このイベントは、「自分がどうありたいか」を考え努力している年上の人々の姿を見ることで、自分だったらどうするかを考える機会や「もっとこの人のことを知りたい」と思えるような大人との出会いを持つてもらう目的で企画されたが、普段知る事のない、アート制作の裏側やアーティストの考え方等に触れることができたのは若者にとって大きな刺激になったという声が寄せられた。



東京都美術館ボランティアと東京藝術大学の学生と若者が交流する様子

本郷拠点では、居場所の一部として1階を地域に開放されたカフェと位置付けて運営し、カフェスタッフの手伝いを通じた職業体験の機会を提供することができた。8月末のカフェ最終日には、スタッフとして頑張る若者の様子を見に来る保護者の姿を見て、「自分も親に来て欲しい」と連絡を取り出す若者の姿も見られた。また、日頃から活動を支えてくださっている支援機関の方々や居場所の移転先の関係者等、多くの方々にご来店いただき、若者を地域で見守る雰囲気と大切さを実感した。

最終日のイベントでの若者たちは、職員の想像以上の頑張りを見せてくれた。最初から全員が全力を出してスタートを切つたわけではないが、一人の頑張る雰囲気が伝播して、結果的に皆が活き活きと仕事をするようになり、他者との関わり合いが当事者の気持ちや行動に影響を与える様を目の当たりにした。また、終了直後には、「接客のバイトをしてみたい」「またやりたい」という将来への前向きな発言や行動があちこちでうまれていた。カフェでの活動を通じて「見守ってくれる大人」に認められることが若者にとって大きな喜びであること、あたたかく若者の姿を見守る目が地域の中で広がっていくことで、若者は目標や希望を見つけ、邁進していくことを再確認することができた。



カフェでの職業体験の様子

### ▶居場所事業から得られた示唆、今後の課題

自分の進路やその後の人生について考える中学及び高校3年生が居場所の中で共に過ごすことで、若者自身が「自分はどうありたいか」を考え始める傾向が見られた。若者の変化が想像以上に伝播していくことは、居場所活動が提供する重要な価値の一つとして挙げられるであろう。

運営上の課題としては、居場所が若者にとって日々を生活していくためのエネルギーを蓄える場所であるがゆえに、居場所にとどまり続けてしまうというケースをどうするか、という点が挙げられる。

自分を受け入れてくれる場所であると同時に、成長していく過程で新しい居場所を社会の中に見出したり、移っていくことを促す役割を居場所の職員が担う必要性を感じられた。

また、新規の若者や変化のペースについていけない若者にとっては、「頑張らなければならない」場だと認識してしまう懸念がある。元々、学校や家庭等のコミュニティの中で辛さを感じ、こぼれ落ちた若者が繋がることが多いため、「頑張らなければならない」と強く感じることで、再度こぼれ落ちる可能性もある。

加えて、居場所における若者の変化が著しいゆえに、若者の状態を把握して適切な関わりを判断する難しさが課題として挙げられる。若者の状態把握、それそれに合った活動内容の提供等を今後も考え続けること、それを具体的な活動や機会として若者に提供し続けていく事が重要であると考えている。

人と接する中で傷ついてきた経験を持つ若者たちと直接関わる人材であるため、若者に興味関心を持ち、能動的に接することができて、安心感を与えることができる人がいることは、居場所における若者の利用および定着につながるため、職員以外で若者に継続的に「関わる人」として、ボランティアの存在は非常に重要である。

今年度は、新たに募集を行い、結果として約40名のボランティアが参加した。活動内容は、毎回の居場所に直接来所して、若者たちと一緒にゲームやアクティビティを行ったり、食材の買い出しから夕飯づくりを一緒にして、共に時間を過ごすことを主としている。ただし、その過程で大切なのは、若者自身が何か新しいことにチャレンジしてみようという意欲や自分自身の将来を考えるきっかけとなるように、若者たちと会話等を通じて関わることである。

毎回の居場所後には運営振り返りを行い、そこで若者の背景情報や近況の共有、職員・ボランティアのその日の若者に対する見立てを共有することで、今後の若者一人ひとりへのより良い関わり方の検討につなげている。また、居場所での活動だけでなく、若者への関わり方をはじめサンカクシャの活動への理解を深める目的で、それぞれの若者対応の具体的なアクションを検討する毎月定例のケース会議に任意で参加ができるようにし、文京区教育センターと連携して月例で若者との関わり方の相談会も行うこと、居場所での活動以外の機会も設けた。

他にも、四半期に一度オンライン交流会を開催することで、ボランティア同士やサンカクシャ職員とのつながりをつくり、居場所後の振り返り等で解消しきれなかつたボランティアの疑問や不安も表出して話し合う場となる等、サンカクシャとボランティアの間にある認識やコミュニケーションのギャップを埋めることにもつながっている。

事業3年目である2021年度の成果として、居場所での若者との関わりだけでなく、若者の個別対応や社会サンカク事業のプログラムで若者のサポートをすることができる約40名のボランティアに継続的に参加していただくことができた。

他方で、現在活動に参加している大学生・社会人ボランティアはそれぞれ進級やライフステージの変化にともない、参加頻度や参加の仕方に変化が生じている人も出てきている。

今後は、年2回程度で募集をするとともに、継続参加するボランティアを増やしていくための機会づくりやその活

動拠点としての居場所を盛り上げていく展開を目指していきたい。



居場所後の振り返りの様子

#### ▶文京区内の大学との協働

昨年度から跡見学園女子大学 板東充彦先生のゼミと連携・協働を行ってきた。

今年度は、主に居場所での活動に参加していただきながら、10～11月に行ったクラウドファンディングの実施サポートや文京区内にあるインターネットラジオ局 OTTAVAとの連携企画において若者サポートにも協力いただいている。

先述のボランティア同様に、ゼミ生も居場所終了後の振り返りへ任意で参加できるようにしている。加えて、毎回の活動後に自身の感想や気づきを提出していただいている。提出された個々人の振り返りは、初回参加時から最近のものまでを取りまとめて、自分自身の学びの積み重ねと変化を可視化する題材として活用し、ゼミの授業内で各々の学びを振り返るセッションも行った。

文京区内の大学の学生が参加して若者と関わることは、同じ地域で生活する若者にとって刺激になることが期待される。また、参加するゼミ生にとっても、自分が通う大学の周辺地域に住む若者と関わることで、卒業後の進路や自分の人生の指針を考えるきっかけになっているようで、子どもに関わる仕事に就こうと考えているという意思表示をするゼミ生も出てきていることは1つの成果と言っても良いであろう。

さらには、大学主催のシンポジウムにおいて、プレゼンテーションやポスターセッションでサンカクシャでの活動体験を発信するゼミ生もいて、さらなる機会につなげていけることが伺える。

翌年度以降に向けて、板東ゼミとは連携を継続させつつ、現在は3年生が中心のため、4年生になった後も参加しやすいようにコーディネートをしていく、新3年生も合流することで、1人ひとりの若者を継続的に見守っていくことができる支援者たちの芽(目)が育つように文京区の事業を発展させていきたい。

## 新指標開発の理由・新指標の内容

#### ▶背景と目的

若者支援の現場では、支援による若者の変化と支援の質へのフィードバック観点で、妥当な指標の開発が常に課題となる。

サンカクシャも3年間の取り組みの中で、特に支援の質の向上に向けて、現場運用に適用できる指標開発を進めてきた。

初年度は、利用者の成長や自立を支えていく場としての居場所がどうあるべきか、居場所を利用する若者の姿を通じてあるべき姿を模索していく中で、「自立度」「依存度」の指標を作成した。

この指標では、若者自身が「自己決定が出来るか」「自己開示が出来るか」を客観的な指標にアウトプットすることで、支援の質の向上に役立てることを目的にしている。

定期的な指標アウトプットをしていく中で、若者自身が「こうありたい」と思うものがあるか、「こうありたいもの」についてどのような認識をしているのかというWAM事業のゴールが測れなかったこと、基準はありますつも職員の主觀によって同じ対象への振れの有無の確認が必要という2点の課題があつた。

今年度では、

- ・より「支援を通して目指したい若者の状態に近づいているか」を測れること
  - ・支援者間の指標にブレが生じているかを確認できること
- との2点を抑えられる指標の開発に取り組んだ。

#### ▶取組内容

事業1～2年目はサンカクシャ職員と伴走支援者が共働して指標作りを行った。

その主な目的は、若者支援におけるサービスとしての居場所の質の分析と改善である。

若者にどのような姿になってほしいかという抽象的なイメージを、既存の自立度・依存度の尺度を用いて現場運用に即した指標に落とし込んでいる。

作成した指標を用いて、若者本人に対して支援者目線での評価を行った。

結果として、サンカクシャの継続的な関わりによる自立度・

依存度の変化は有意には発生しなかつた。

その反面、特定の若者に対して行った関わりや若者の環境変化を共有するきっかけが増えて、支援の質向上と支援者間の認識共有につながることが示唆された。

3年目は上記のフィードバックを踏まえて、「支援を通して目指したい若者の状態に近づいているか」を測れることと、支援者間のブレ解消を主目的として指標の改善を行った。

サンカクシャ職員に加えて、外部コンサルタント及びデータ分析の専門家と共に指標を開発している。

目的に合致する新指標を開発するために、本事業が想定する若者の状態目標からの逆算と、学術的に実績のある既存指標の項目活用を行った。

前者に関しては、他者との交流やバイト体験などの若者が取っている行動に応じて、若者の状態変化を定義することで、指標の項目を現場に即する形に落とし込んだ。

後者に関しては、自己効力感、レジリエンス、居場所感に関する既存の学術的な指標を参照し、本事業の取得したい項目を加味して引用することで妥当性の担保を図っている。

新指標の質問は若者自身による「自己評定」と、職員による「他者評定」を同時に実施し、若者の変化を大きく2つ「自己認識」と「他者との関係性」に分け、それぞれ小項目を設定した。変化を図るために、1回目の3ヶ月後に2回目のデータ取得を実施した。

回答取得時には、下記の点に留意することで回答内容の妥当性の担保と、回答者によるバイアスの発生を防いでいる。

・若者向には、「サンカクシャの活動の振り返りをして今後に活かす」という理由で、アンケートへの回答を促した。

これによって、自身が評価されている認識を可能な限り軽減している

・支援者向には、自分の回答完了前に、他の支援者による各若者への回答が確認出来ないよう配慮を行った。



►取得している項目及び、質問文については下図の通り。

【サンカクレベルの項目】

大項目	《自己認識》 自己理解・自己承認・自信 「自分は生きていい」		《他者との関係性》 人とのつながり 「誰かと居て大丈夫」
小項目	・自己受容 ・有用感・役割感 ・安心感	・成功体験 ・自己効力感 ・観察学習 ・失敗への耐性	・コミュニケーション ・自己開示 ・被受容感 ・ありのままの自分 ・他者とのつながり ・他者受容 ・表現力 ・解読力

【サンカクレベルの質問文】 自分のサンカクレベル(自己認識)

概念名	ちょっと難しい LEVEL1	もっと頑張りたい LEVEL2	まあできる Level3	自信あり! LEVEL4
自己受容	彼(彼女)は、自分自身に関心がない、自分の短所や欠点に向き合おうしていない	彼(彼女)は、自分の短所や欠点を把握しているが、あまり自分に向き合おうとしていない	彼(彼女)は、自分の短所や欠点を把握して、自分に向き合い何とかしようと日々もがいている	彼(彼女)は、自分の短所や欠点を理解しており、それらを自分の一部だと認め受容し、気兼ねなくすごしている
有用感・役割感	彼(彼女)は、サンカクシャの中での立ち位置や振る舞い方を見いだせず、輪に入ることができない	彼(彼女)は、サンカクシャの中で自分らしく振る舞っているが、輪に入ることができない	彼(彼女)は、サンカクシャの中で自分らしく振る舞つており、輪に入ることができている	彼(彼女)は、ムードメーカー・リーダーなど、サンカクシャの中で役割を担っており、周囲から頼られ必要とされる存在となっている
安心感	彼(彼女)は、いつもそわそわとしている	彼(彼女)は、ひとりでいるときはくつろいでいるが、誰かがいるときはそわそわしていて落ち着きがない	彼(彼女)は、知っている人といふときは安心してくつろいでいるが、それ以外の人といふときはそわそわしていて落ち着きがない	彼(彼女)は、誰か同じ空間にいても安心してくつろいでいる
成功体験	彼(彼女)は、自分にやれそうなことがあっても、まったく挑戦しようしない	彼(彼女)は、自分にやれそうなことをやってみているが、失敗が多く自信を失っている	彼(彼女)は、自分にやれそうなことに挑戦し始めており、多少の失敗もあるが少しずつ成功体験を重ねている	彼(彼女)は、自分がやれることにどんどん挑戦し、多くの成功体験を重ねている
観察学習	彼(彼女)は周囲の頑張っている人を見ることがない	彼(彼女)は、周囲の頑張っている人を見めることがある	彼(彼女)は、周囲の頑張っている人を眺めて、その人から何らかの刺激や影響を受けることがある	彼(彼女)は、周囲の頑張っている人を眺めて、その人から何らかの刺激や影響を受けることにより、その人の考え方や行動を積極的に真似することがある
自己効力感	彼(彼女)は、自分に自信がない、新たな取り組みへの参加に抵抗感を示している	彼(彼女)は、自分に自信がないものの、誰かが活動を始めたらそれに合わせる形で新たな取り組みに参加している	彼(彼女)は、自分に自信をもち、誰かが活動を始めたら自ら積極的に協力するような形で新たな取り組みに参加している	彼(彼女)は、自分に自信をもち、自ら率先して積極的に新しい取り組みに参加している
失敗への耐性	彼(彼女)は、困ったときや辛い経験をしたときに、立ち直るのに時間がかかる	彼(彼女)は、困ったときや辛い経験をしたときに、立ち直ることができるが、困難の原因を考えることがあまりない	彼(彼女)は、困ったときや辛い経験をしたときに、立ち直ることができ、困難の原因を考えることができる	彼(彼女)は、困ったときや辛い経験をしたときに、立ち直ることができ、困難の原因を分析したうえで改善につなげようと努力を始める

【サンカクレベルの質問文】 他者とのサンカクレベル(他者との関係性)

概念名	ちょっと難しい LEVEL1	信頼できる人に対してあればできる LEVEL2	内側の人に対してあればできる Level3	外の大人のほかに内側の人が一緒にいればできる LEVEL4	外の大人のみに対してあつてもできる LEVEL5
コミュニケーション	彼(彼女)は、周囲の人とうまく会話ができない	彼(彼女)は、支援者となら会話ができる	彼(彼女)は、身内となら会話ができる	彼(彼女)は、支援者がそばにいれば、外の大人と会話ができる	彼(彼女)は、支援者がそばにいなくても、外の大人と気軽に会話ができる
自己開示	彼(彼女)は、周囲の人々に対して自分のこと(出来事、関心、好きなことなど)について話さない	彼(彼女)は、支援者には自分のこと(出来事、関心、好きなことなど)について話す	彼(彼女)は、身内には自分のこと(出来事、関心、好きなことなど)について話す	彼(彼女)は、支援者には自分のこと(出来事、関心、好きなことなど)について話す	彼(彼女)は、支援者には自分のこと(出来事、関心、好きなことなど)について話す
被受容感	彼(彼女)は、自分の存在が誰かに受け入れられていると感じられていない	彼(彼女)は、支援者には自分の存在が受け入れられていると感じられている	彼(彼女)は、身内には自分の存在が受け入れられていると感じられている	彼(彼女)は、支援者のオローがあれば、外の大人に自分の存在が受け入れられていると感じられている	彼(彼女)は、支援者のオローがなくとも、外の大人に自分の存在が受け入れられていると感じられている
ありのままの自分	彼(彼女)は、リラックスして自分らしく振る舞つたり、素の自分で話すことができない	彼(彼女)は、支援者の前であれば、リラックスして自分らしく振る舞つたり、素の自分で話すことができる	彼(彼女)は、身内の前であれば、リラックスして自分らしく振る舞つたり、素の自分で話すことができる	彼(彼女)は、支援者がそばにいれば、外の大人の前で、リラックスして自分らしく振る舞つたり、素の自分で話すことができる	彼(彼女)は、支援者がそばにいなくても、外の大人に自分の存在が受け入れられていると感じられている
他者とのつながり	彼(彼女)は、困った時に相談したり深い話をすることができるような相手がない	彼(彼女)は、支援者に対してあれば困った時に相談したり深い話をする	彼(彼女)は、身内に対してあれば困った時に相談したり深い話をする	彼(彼女)は、支援者がそばにいれば、外の大人に対して困った時に相談したり深い話をする	彼(彼女)は、支援者に対して困った時に相談したり深い話をする
他者受容	彼(彼女)は、相手の意見に共感したり、相手の意見を受け入れたりしない	彼(彼女)は、相手が支援者であれば、意見に共感したり、意見を受け入れたりする	彼(彼女)は、相手が身内であれば、意見に共感したり、意見を受け入れたりする	彼(彼女)は、支援者がそばにいれば、外の大人の意見に共感したり、意見を受け入れたりする	彼(彼女)は、支援者に対して外の大人の意見に共感したり、意見を受け入れたりする
表現力	彼(彼女)は、自分の考えを伝える際、相手がわかりやすいように情報を伝えようとしている	彼(彼女)は、支援者に対してあれば、自分の考えを相手にわかりやすく伝えようとする	彼(彼女)は、身内に対してあれば、自分の考えを相手に伝えようとする	彼(彼女)は、支援者がそばにいれば、外の大人に対して自分の考えを相手に伝えようとしている	彼(彼女)は、支援者に対して外の大人の自分の考えを伝えようとしている
解読力	彼(彼女)は、相手が誰であつても、言つてることに耳を傾けて理解しようとしている	彼(彼女)は、相手が信頼できる人であれば、その相手の言つてることに耳を傾け、理解しようとする	彼(彼女)は、相手が身内であれば、その相手の言つてることに耳を傾け、理解しようとする	彼(彼女)は、支援者がそばにいれば、外の大人の言つてることに耳を傾け、理解しようとする	彼(彼女)は、支援者に対して外の大人の言つてることに耳を傾け、理解しようとする

## 新指標を用いた事業の成果と示唆

### ►新指標からみる事業の評価

継続で支援を行い、1回目(2021年8月)の回答と2回目(2021年11月)の回答結果を得られた17名の変化を持つ、事業による若者への影響を評価した。

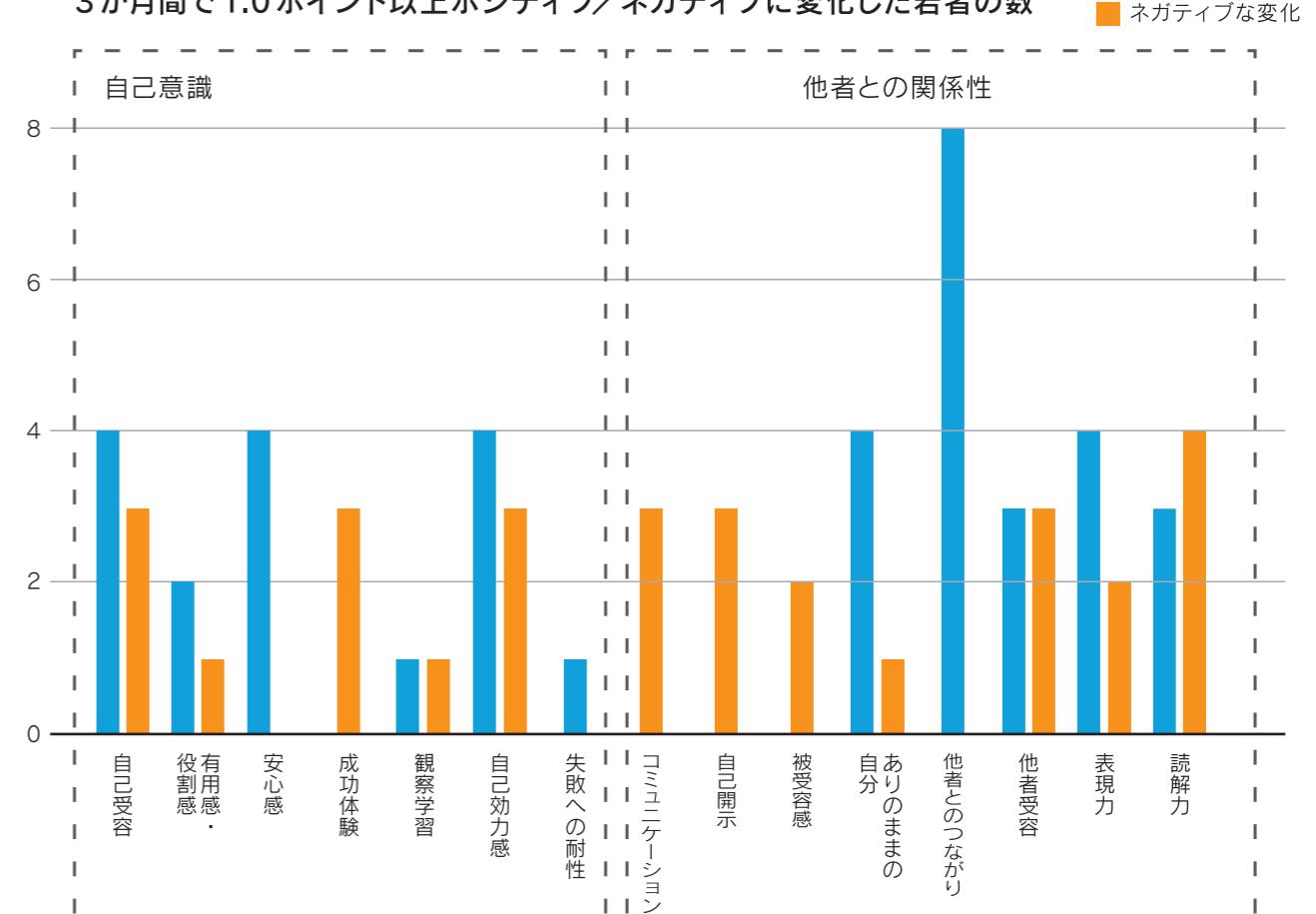
指標による回答結果は、複数の職員による指標の平均値が一定程度以上変動しているかつその傾向が複数の若者に見られた場合に変化とみなした。

具体的には、3か月間で各指標の平均値が1.0ポイント以上上昇もしくは下降した若者が17人中4人以上の項目を変化している。

上記の基準で、指標を前後比較すると下記の結果が得られた。

- 3か月間で6項目についてポジティブな変化が見られる傾向があった特に「他者とのつながり」に関する指標が大きく変動した
- 3か月間で1項目についてネガティブな変化が見られる傾向があつた特に他者との関係性の「解読力」に関する指標が変化した
- 総合してみると、17人中12人の若者に対してポジティブな変化を提供できている本事業が特徴としている、「多様な他者との関わりあいによって、安心感を持ってやりたいことへの邁進を促進する」取り組みが、多くの若者に対してその目的を達成できていると評価できる。

### 3か月間で1.0ポイント以上ポジティブ/ネガティブに変化した若者の数



#### ►新指標自体の評価

1回目と2回目の回答において、職員による若者の他者評定において、各若者に対する職員のスコアは概ね一致しており、職員間の指標に対するズレは少ないことが分かった。

このことは、「支援者同士が若者の状態を評価して、支援の関わり方を決める」という運用に活用できる指標であることを示唆している。

その反面、「支援内容の変化」という要因が1回目と2回目の回答結果に影響を与えている。

支援提供内容と職員による他者評定の間には相関があるものの、今回示せなかつた前後関係までを精緻に評価できるようにすることが今後の課題として残っている。

若者自身による自己評定は、回答収集の特性上、母数の担保が難しいことが大きな課題となった。

事業特性上、特定の指標で評価される学校や地域社会への抵抗感を持つ若者が大半を占めている。

そのため、当団体との信頼関係が不十分な段階で指標アンケートを提示するデメリットを加味して、すでに関係性が構築できている若者からのみ回収している。

指標開発によって、支援提供により見られたポジティブな変化としては、

- ・スタッフ間で若者の状態の認識と支援方針のすり合わせが容易になる
- ・スタッフと若者本人間で若者の現状や抱える課題の認識ズレを検知できる

の2つが見られた。

従来は、個別の職員ミーティングで若者の状態と支援方針をすり合わせていたが、指標導入によって、認識すり合わせの効率化による負担軽減と、定性ではなく一定の定量的指標を用いることで支援の質改善につなげられた。

職員個人の属人的なスキル・経験に左右されずに、適切な支援を提供できる体制構築に活用できている。

「サンカクシャでは若者対応後の「振り返り」の時間や、若者一人ひとりの方向性を考える月に一度の「ケース会議」の機会を重視している。

会議の中で若者の状態と支援方針をすり合わせる際、指

標を導入したことでの若者を見る切り口が増え、若者の状態や変化を職員間で共有するきっかけが充実した。

#### ►指標に関する今後の示唆

サンカクシャの事業運用上、新指標の活用によって若者のアセスメントと支援方針策定における効率化と質の担保が可能になった。

多くの支援機関はサンカクシャ同様、アセスメントと方針策定が職員個人の属的なスキル・経験に依存する傾向がある。

新指標の導入は事業自体の評価を可能にするだけでなく、支援機関に生じがちな上記の組織課題の解決にもつながるため、サンカクシャ以外でも活用を今後進めていくことが必要である。

新指標は、サンカクシャ内のみで活用されている現状である。支援機関や地域で活動する団体とゴールイメージを共有する際、この指標を活用し、若者支援の必要性の認知及びサポートの拡充を目指したい。

そのために、まずは行政機関や他団体と協働で支援しているケースにおいて、この指標を活用して情報共有し、若者に関心を持ち、一緒に見守る地域の眼差しを増やしていく

## 地域との連携・行政との協働

#### ►事業1～2年目の地域連携の実績と課題

1～2年目の活動では、

- ・地域の公的機関との連携構築
- ・地域の民間機関と知見共有ができるネットワーク構築

の2点を進めてきた。

前者は、現場レベルで互いの機関の支援上の強味と限界についてすり合わせを行い、互いを補完し合える形での連携構築を進めてきた。

初期段階ではサンカクシャの取組内容やその意義が分からにくいという課題があつたが、文京区内外での支援内容や事例の共有によって理解を深め、公的機関で対応が難しい若者をサンカクシャに繋ぐスキーム作りに成功している。

後者は、区内の民間団体と互いの支援内容やノウハウを共有し、地域全体の若者支援の受け皿強化を図ってきた。他地域より、文京区内の若者支援団体が少ないと、支援のノウハウ不足による受入能力のバラツキが課題となっていた。

お互いの支援内容や事例を共有したり、困りごとを相談し合うやり取りを重ねて、各団体だけで抱え込まない関係構築に成功している。

上記の2つの取組によって地域連携のベースとなる形は構築できた。

3年目は、構築出来た型を地域でさらに広げるべく、機関同士の繋がりに昇華しつつ、繋がりの質向上に注力している。

#### ►3年目の取組内容と実績

1～2年目と主要な取組内容は変わらず、連携の質と頻度の強化に注力した。

主要な各連携機関との具体的な取組内容は下記の通りである。

#### 公的機関：教育センター

1～2年目にサンカクシャに繋がった若者及び3年目に新規で繋がった若者に関して、毎月の定例報告会の開催と教育センター内部会議への参加を定期的に行つた。

若者の様子や生活環境の変化を定期的に伝えることで、繋いだ後の信頼構築を強化できている。

また、教育センター職員にサンカクシャのボランティア向け相談会を開催いただく等、支援者間の連携も構築された。

#### 公的機関：社会福祉協議会

1～2年目同様、新規ケースの紹介を受けつつ、両機関の支援者が共働で継続支援を行つた。

特に若者と保護者両名に関わるケースが多く、若者はサンカクシャ、保護者は社会福祉協議会が主に関わる体制を構築できた。

また社会福祉協議会を軸に、公的・民間機関と相互に紹介を頂き、支援者同士の関係構築が進んだ。

#### 民間機関：さきちゃんち運営委員会

互いの活動内容の共有を通して、隔月の合同勉強会と事例の相談会を行うを通じて、支援の質向上を図る体制に繋がつた。

この取組を通して相互の活動理解が進み、さきちゃんちで対応困難なケースの紹介を頂く等、活動の補完関係も築けている。

#### 民間機関：てらまっち／なごみ

互いの活動内容や課題感を共有する会を定期開催できている。

若者の生活課題解決に直接関わる機関ではないが、地域の若者特性に関する認識共有を行うことで、地域内の各機関の立ち位置の整理に繋がっている。

#### 民間機関：跡見学園女子大学

2年目同様に、院生の実習及び学部生のボランティア受入を行つた。

地域における支援体制の重要性を学生層に伝えられる機会となつた。

#### ►3年目の総括

定例会の場を設けたり、若者ケースに共同で対応したことを通して、地域機関及び団体と若者の対象層や対応の方針性、互いの強み弱みの共有をしてきたことで、定期的にケースの紹介を受けられるようになったことが最大の変化である。

事業目標である地域全体での受け皿強化を、機関同士による補完とノウハウ共有による底上げによって、一定程度達

成できていると認識している。

サンカクシャは特に、既存の機関の限界とされていた「公的資源で提供できる範囲外の支援」という課題をカバーする役割を担えること、そのニーズが強いことが改めてわかつた。

今回の取組によって、地域の支援の受け皿強化に必要な要素は、「既存の支援機関との相互理解」「地域の支援体制における自団体の役割の明確化」「地域全体での支援の質／スキル底上げの取組」の3つであると考えられる。

これらは、定期的な情報共有によって、互いの役割の擦り合わせや得意・不得意なケースの理解が深まっていくと実感している。

また、定期的な勉強会を開いてそれぞれの現場で実践しているノウハウや知見、ケース対応における考え方や価値基準に触れることができた。

そして何よりも、これまで挙げてきたような取組を継続させることができることが組織間のコミュニケーションとなり、各々が協働し合える存在であるという意識を持ち続けられると考えている。

## 3年間の変化で起こせなかつたこと・団体としての葛藤や改善点

### ▶地域の連携を深める以外の若者との接点作り

地域で活動していると、困りごとや課題を抱えているのにも関わらず、支援につながっていないという若者に遭遇する。

サンカクシャにつながる若者が、友達を連れてくることがあるが、そうした場合に、上記のような若者とつながることがある。

困りごとを抱えた時に行政に相談したり、制度を利用する感覚を10～20代で持っている若者は少ない。

しかし、支援機関は相談にきて欲しいと待っている。若者支援はまだ不足している上に、支援や相談に馴染みがない、抵抗がある若者とつながることのハードルは非常に高い。

また、相談窓口に保護者は来るものの、本人が来ないという声も上がっている。

このように困りごとを抱える若者とつながるための試行錯誤は業界的に不足している。

今回、支援や相談に抵抗がある若者とのつながり作りを試行錯誤したもの、日々関係機関より紹介でつながつくる若者との対応に追われ、アウトリーチに関する取り組みを十分に重ねることができなかつた。

助成期間は終わったものの、今後もいかに若者とつながるかの試行錯誤は欠かせない。

特に、相談や支援を届けるときに、「誰に相談するか」が大事になる。相談の前の信頼関係というものが欠かせない。

いきなり、相談や支援となると若者は引いてしまう。では、信頼関係を何で築くべきか。

NPOとして、支援や相談を取り口にしない若者とのつながり作りを模索していく必要がある。

サンカクシャは若者たちと信頼関係を築けるように、居場所で遊びを重要視している。

若者たちと趣味でつながり、そこから信頼関係を築き、徐々に相談をしてもらえる関係になる、支援の臭いがしない若者へのリーチの仕方をこれから模索していきたい。

### ▶目の前の若者の支援と事業作りのバランス

上記の課題にも関わるが、目の前の若者の対応や伴走に

注力し過ぎるあまり、それ以外のことに十分に対応することができなかつた。

アウトリーチ、行政への若者支援の必要性の訴え、政策提言、課題の可視化、ネットワーク作りなど、モデル事業としてまだまだやることがたくさんあったものの、十分に形にすることことができなかつた。

もちろん、目の前のつながつてきた若者の対応は大事である。

目の前の若者に対応しながら、いかに活動を維持、発展する体制を築くか、より困難を抱える若者に出会いに行けるか、より多くの人を若者を支える扱い手にできるか等、同時に複数のことを形にしないといけない難しさもある。

目の前の若者の対応をするノウハウと、アウトリーチやファンドレイズ、ロビイング等のノウハウは全く違うものである。

ただでさえ、少ないリソースでないとあらゆることをこなさないといけないので、このジレンマとどう向き合うかは団体としてかなり悩み苦戦した部分である。

支援にあたる人材が、ファンドレイズやロビイングや発信などのことを学び、活動の幅を広げるような人材育成の体制を作っていくことも必要であり、現場で目の前の若者と丁寧に関わる人と、事業をつくっていく人を切り分け、採用できるほどの財源の確保に向けた働きかけを社会に行政に発信していく必要があると感じた。

現場での葛藤や悩み、難しさを自分たちだけのものとせず、もっと周りの人達にも共有し、一緒に考え、みんなと一緒に模索していく体制を作ることができなかつたかという反省もある。

こうした葛藤や悩み等も大事なこととして正直に共有し、他の実践者のためになればと願う。

今後は、若者との関わりも団体の運営も事業作りも、自分たちの葛藤も含めて、色々な方々に発信し、知つてもらい協力をもらい、応援してもらう努力も重ね、自分たちだけの問題、課題として抱えないようにサンカクシャも居場所も開いていきたい。

#### ▶若者を支える大人を増やすことができる居場所作り

これまでの居場所は、目の前の若者が安心できるように、安心できる人や場を獲得できるように、という想いで活動を作ってきた。

この点においては十分に支援を作ることができたのではないかと実感しているが、地域の色々な人達にも活動に参画(サンカク)してもらい、支援を作れたかというとまだ不十分であるを感じている。

若者を支えていくという観点で考えると、1人の大人が見守っているだけの状態より、複数人の色々な立場の大人がゆるやかに見守っている状態の方が望ましい。

そういう点で、地域の人を巻き込み、一緒に若者を見守る体制を作っていくことがより必要になる。

居場所は、閉じられている方が、たしかに若者は安心できる。

しかし、それによって依存させてしまったり、自立を妨げてしまうリスクも生じる。

若者に安心した場を作ることに重きをおいて、活動を作ってきたサンカクシャだからこそ、若者が安心しながら、地域に開かれた居場所を作ることができるのではないか。

今後は閉じられた居場所ではなく、地域に開かれた居場所を作り、地域の人が、地域の企業の人が、若者の存在を気にかけ、みんなで若者の成長を見守ることができるネットワークを作っていくたい。

#### ▶文京区における若者支援の体制作り

先述した通り、義務教育を終了するタイミングと、今後変わっていく可能性はあるが、児童福祉法の定義によって18歳までで支援が途絶えてしまうことによって、若者が孤立しやすい現状がある。

「子どもの貧困」という言葉の広がりとともに、義務教育までの支援は公的にも民間にも拡充してきたが、義務教育終了後の支援はまだまだ不足している。

子ども若者育成支援推進法のもと、子ども若者総合相談センターの設置や子ども若者支援地域協議会を設置する自治体も少しずつ増えてきたものの、若者の課題を認知している自治体や、支援体制を作ろうとしている自治体は少な

い現状にある。

今後、文京区においても若者支援をどのように展開していくか対策を取る動きが出てきているようである。

その際に、若者にどのような課題があるのか、どのようにしたら課題を抱える若者とつながることができるのか。この点において3年間地域で若者たちと接し、その変化を見届け、若者たちと繋がろうと地域で奮闘したプロセスやノウハウの共有を行っていきたい。

それだけでなく、具体的な支援施策の提言を積極的に行うこと、文京区での若者支援、ひいては全国的なモデルとなるような動きに発展させていけるよう、文京区に、社会に貢献していきたい。

これまでの助成いただけたことで活動ができ、地域や行政の方々に支えいただけたことで活動を継続させることができたため、この3年間の取組をしっかりと社会に還元し、形にしていくことを模索したい。

#### ▶深刻化するニーズに対応した就労支援や居住支援の展開

これまででは教育センターとの連携が主だったが、連携の実績や団体への信頼も少しずつ積み重ねることができたためか、連携機関が少しずつ増えてきた。

特に、地域の民間団体との連携が難しいとされる子ども家庭支援センターからの依頼も少しずつ増え、虐待を受けている若者、親を頼れない若者の対応を求められることが増えてきた。

また、地域の方からの紹介で10代で家出をしてしまった若年女性の支援にあたり、親に頼れず、住む場所を失ってしまう若者との関わりも経験した。

10代で虐待等の影響により親や身近な大人を頼ることができない、かつ18歳を過ぎてしまい公的支援を受けにくくなる年代を地域でどのように支えていくか、これは居場所を作れば解決できる問題ではないことに気づいた。

親を頼れない若者がどう生きていくか、生活のこと、働くこと、住まいのこと、「若者が生き抜いていく」ことの大変さを間近で触れているため、団体として就労支援や居住支援等の生きていくことへの支援を今後拡充していきたい。

具体的には、団体として2020年7月より始めた居住支

援を拡充し、2022年度内に文京区でも若者が安価に住むことができるシェアハウスを準備する。

連携している機関に、シェアハウスの存在を伝え、家出をしてしまった若者や、18歳を過ぎて社会的養護の支援が切れてしまう若者、家にいたくない若者を積極的に受け入れ、10～20代で住む場所を失ってしまう若者がいることを行政や地域、社会に広く訴え、若者支援の必要性を訴えていく動きを展開したい。

居住支援だけではなく、就労支援も行っていく。就労支援は、既存の取組は既に存在している。しかし、公的な場の空気や雰囲気が苦手、支援を受けていると感じられる場には抵抗を示す若者が多く、相談や支援に繋がらないことをこれまでの活動から痛感した。

サンカクシャの居場所は、「支援の匂い」を感じることなく、若者が安心して過ごせる場作りができる。そうした場を作っていることから、この場で就労支援等の自立を見据えた支援を展開していくことで、既存の就労支援等に繋がらない若者に対して、働くことをサポートする機会を届けることができると考えている。

10～20代に対して、安心できる居場所を提供するだけではなく、働くこと、生きていくことをサポートする支援を積極的に実施し、若者が地域の大人に見守られながら地域で生き抜くことができる体制を作っていくたい。

#### ▶広域の若者支援ネットワークの構築

3年間、教育センターの方々と連携して感じたことは、義務教育を終了してしまうと、若者の行動範囲が広がり、地域から離れ、支援の手が届きにくくなってしまうことだ。

高校に進学し、高校生活を無事に送ることができれば良いのだが、高校生活がうまくいかず、学校に馴染めず中退等してしまう若者は多く存在する。

関係が築ける前に高校を中退してしまうと、その若者への支援は一気に途切れてしまう。

一方で、義務教育の間に支援につながり、義務教育終了と同時に支援が途切れてしまうケースもたくさん見てきた。

中学校と高校は管轄が変わるため、連携が難しいが、中学までを支援している各自治体と、高校で支援をしている

都の連携は若者支援においては欠かせないと考えている。

しかし、当然ながら文京区で育った子が、文京区の高校だけに通うわけではない。

全てのケースを追いかけることはできないが、せめて各高校に配置されているユースソーシャルワーカーと中学校に配置されているスクールソーシャルワーカー、高校に入って支援をしているNPOと地域で支援をしているNPOが集い、連携していくネットワークを作っていく必要があるのではないか。

若者支援においては、区を超えて支援を作っていく必要がある。しかし、区単位で支援を行ってきた各自治体は区を跨いでの支援を作っていくことに限界がある。

そこに、NPOの役割があると考える。

これまで3年間、文京区のあらゆる人と連携し、信頼を少しずつ積み重ねたサンカクシャだからこそ、近隣の区も巻き込んで、区の境目を超えて若者を支えていくネットワークを作ることができるのでないかと考えている。

この広域の若者支援ネットワークは全国的にもまだ事例は少ない。

広域の若者支援のネットワークを構築し、支援の連携がより強固になるような事例を作り、全国的なモデルとなるような取組についていくことを今後計画している。



## 連携機関・地域の方々からのコメント

サンカクシヤとのつながりは3年目になりました。教育センターでスクールソーシャルワーカーや総合相談室で相談をしている(た)お子さんの紹介先として連携をしていますが、サンカクシヤにつながったお子さん達の成長を聞くことが多くなりました。

まずはスタッフとの安心できる関係性のもと、来ている子ども達と一緒に活動することが経験としてとても重要だと感じています。スタッフは程よい距離感で関わり子どもの自発的な行動を促してくれているため、それぞれのペースではありますか、積極性や責任感、忍耐力のような力が育っていることを感じています。

人は人と関わることで自分を知り、安心できる人間関係の中で自分の弱さも受け入れることができるのだと思います。サンカクシヤの活動の良さは、無理なく子ども同士で自発的に関わっていく場所であることだと思います。

一人でも多くの子どもが、仲間と一緒に活動することの楽しみを知り、その中で自己成長していくことができるよう、これからも教育センターからサンカクシヤにつなぐ働きかけを続けて、地域を基盤とした仲間として連携を深めていければと思つております。

文京区教育委員会 教育推進部 教育センター  
主査(心理) 教育相談コーディネーター  
石津 陽子

地域で孤立する若者を面で支える仕組みをつくりたいと、NPOとの協働という形で模索しながら支援の仕組みをゼロから一緒に考えてきました。

行政や地域、それぞれ同様の課題感を持ちながらも、若者へのまなざしやアプローチ方法が違うことから、地域で連携を進めていくというプロセスは決して平坦な道ではありませんでした。しかしながら、当事者である若者を中心に、彼ら・彼らが本来持つている力を発揮できる環境をどう整えていかれるか、試行錯誤を重ねたことで課題が地域や行政に認識され、徐々に紹介されるケースも増えてきました。また、「居る」ことが認められる場で力を取り戻していく若者たちを目にして、やつてきたことの意義を再確認できました。

ゼロからのスタートだったため当初の想定よりも時間はかかりましたが、若者をめぐる支援は他分野を横断するため、今後は重層的支援体制を構築していく行政とともに協議を重ねながら取り組みが定着・発展するよう引き続き協働していくと考えています。

文京区社会福祉協議会 地域福祉推進係／地域連携ステーション フミコム  
係長 浦田 愛

サンカクシヤさんは、私たち茗荷谷クラブにとって、文京区における「若者支援」の同胞のような存在です。15歳～20歳という、社会資源がほろと失くなるブラックボックス周辺と一緒に見つめ、それぞれの得意とするアプローチで、文京区全体の若者の孤立の課題に取り組んできました。サンカクシヤさんは思春期という、一人の人として成立していく過程において、様々な大人や人との関わりにおいて育ちあっていくということを大事にされていたのではないかでしょうか。外の世界が自分を見捨てずに、受け入れてくれるものだという感覚を丁寧に育てていたのではないかでしょうか。「あれ、僕の声を聞いてくれる人がいる」「自分はそんな変な人じゃないんだ」という自覚が無自覚な感覚の産声、つられて一緒に腹の底から笑い合える人たちとの日常の彩り、これらがサンカクシヤの居場所を通じ、彼ら/彼女らの中に培われたように想像します。同時にスタッフも若者に育てられ、その双方向の関係性が社会の中で息づく下支えとしてなったとも感じます。従来の一方向の支援関係が孕む、本人の主体性を剥奪する暴力性を超えて、孤立する若者が再び社会の一員に“参画”する貴重な実践です。こうした事柄は、残念ながら費用対効果での物差しで翻訳しきれないところでありますので、お言葉を添えさせていただきました。

公益社団法人青少年健康センター  
茗荷谷クラブ  
倉光 洋平



2019年度後期から、私のゼミ生らがサンカクシヤの居場所にお邪魔し、学生の学びにとって貴重な機会をいただいています。支援の現場は一般的に「支援者」と「対象者」から成り立っていて、外部から来る学生は「よそ者」あるいは「邪魔者」になることが多いのですが、サンカクシヤのスタッフは「そうではない。むしろ、居場所にはそういう外部の存在が重要だ」と言ってくださいます。学生たちもそれを感じ取っているのでしょうか。ゼミ生たちの2020年度の延べ参加者数は、前年比で3倍以上でした。いくつかの新規事業にも参加させていただきました。また、大学でのゼミにも前期と後期の2回、スタッフの方が参加してくださいました。

支援の現場において、大学のゼミ単位で学生を積極的に受け入れる試みは少ないのではないでしょうか。時に「ノイズ」となる外部の者を含めて支援を行うには、その先見性と共に技量が必要だからです。地域の視点から見れば、民間の支援団体と教育機関がそれぞれの資源を生かしてひきこもり支援を行うのみならず、彼らにとって住み心地の良いコミュニティを作る試みです。今後、サンカクシヤさんとの協働がますます展開していくことを私は願っていますし、その意義と効果の検討も共に行っていきたいと思います。

跡見学園女子大学心理学部  
板東 充彦



初代さきちゃんちが閉じる頃、サンカクシヤさんに相談し、子どもたちと居場所に遊びに行かせてもらいました。初めての場所に緊張する子どもたちも、やがて、やりたいことをやつたり、わがままも言えたりして、すっかりくつろいでいる様子でした。とてもフレンドリーで思慮深いスタッフの皆さん、フラットな感じで寄り添っていて、子どもたちが安心して話をしたり、自分の時間を過ごしたりでき、自分の可能性を見つけるきっかけが生まれそうな環境だと安堵したのを覚えています。

サンカクシヤさんは、社会的孤立に対する居場所の役割や様々なアプローチを学ぶ勉強会などを一緒に企画・実施していました。いつも懐っこい笑顔を見せるスタッフが、大人が求めがちな子どもの姿に「そうではない」と、真剣な眼差しで子ども側に立った視点でお話をされる場面もありました。本当に一人ひとりに寄り添い、若者と伴走しているからこそ発言であり、子どもの気持ちを発信してくれる頼もしい存在だと感じました。

これからもサンカクシヤさんと連携して、地域の安心できる居場所やつながってくれる仲間を増やし、子どもや若者を応援ていきたいと願っております。

さきちゃんち運営委員会 代表 八木 錠子





田中 成幸(たなかまさゆき)

合同会社 Co-Work-A 代表社員

認定特定非営利活動法人育て上げネット パートナー

GOB Incubation Partners 株式会社 パートナー

2008年に株式会社野村総合研究所に入社し、子ども・若者支援に関わる調査研究・コンサルティングに従事。現在は、認定特定NPO育て上げネットのメンバーとして困難を抱える若者の支援の現場に身を置く傍ら、若者の起業を支援するGOB-IP社、各種伴走支援や政策調査等を行う合同会社Co-Work-Aを運営し、複数の組織に身を置きながら若者支援に携わっている。内閣府子ども・若者支援地域協議会／総合相談センターアドバイザー。

3年間、サンカクシャの伴走支援者として同団体の活動に携わり、地域の中で若者支援が定着していくプロセスに関わさせていただきました。

子ども・若者を支援していくことの重要性は、以前に比べると社会的に認識されてきたと言える一方、どのように彼らをサポートしていくべきかという点では、まだまだ当事者のニーズとの間に乖離があります。子ども・若者の中には困難を抱えていたとしても、大人や地域から「支援」という形でサポートされることを避けたいと思う人達もいます。サンカクシャがこの3年間で、試行しつづけてきたことは、そのような子ども・若者と、どのように関係を構築していくかを考え続けることだったのではないかと思います。

当初、地域や支援機関と繋がらない若者へのアウトリーチから始まった活動は、繋がった若者のニーズに応える形で、居場所支援、就労支援、学習支援、生活支援といった

形に広がっていました。居場所支援は、居場所と働く体験を積むためのカフェの運営という、ノウハウ蓄積の無いサンカクシャにとっては、大きなチャレンジとなる活動となりましたが、地域の温かいサポートもあり、様々なトラブルなどもありながら何とか運営していく事ができていたのではないかと思います。居場所で時間を過ごしながらスタッフと何気ない会話を交わしたり、カフェで地域の生活者に声をかけられながらコーヒー やサンドイッチを振舞う若者の姿は、それほど頻度高く様子を見に行けない私の目にも、成長しているように映りました。残念ながら、入居しているビルの契約上、居場所は事業3年目の半ばで閉所となりましたが、運営を通じて得られた経験は、サンカクシャの今後の活動に大きく寄与するのではないかと思います。

居場所支援に留まらず、サンカクシャの活動のほとんどは、行政機関や民間の支援団体、地域の生活者の方々のサポートによって支えられていました。当初は、実績も知名度もないサンカクシャが、地域の支援者とどのような関係を構築するべきか模索する状態が続いていましたが、スタッフが日常的に支援者や生活者の方々と接点を作り、活動内容やサポートしている若者の様子を共有することを重ねる中で、徐々に信頼関係が生まれ、これまで支援の届かなかつた若者をサンカクシャに繋げてくれるようになっていったことは、3年間の事業の大きな成果なのではないかと思います。この事業で培われた関係性をベースに、より良い活動に繋げていってほしいと思います。

最後に、これらの活動が社会、とりわけ当事者である若者にとってどのような意味があったのかを把握するための評価手法の構築にも3年間取り組んできました。この評価指標は、若者の変化を通じて、若者の良し悪しを評価するのではなく、自分たちの取組が本当に意味があったのか、改善の余地はないのかを理解するという目的のもと、現場で得られた気づきや知見をベースに組み立てられました。事業3年目は、サンカクシャ側の評価と当事者自身の評価とを突合させることで、仕組みとしての信頼性を高めようと試行錯誤が重ねられてきました。現段階では指標を活用事例の数が蓄積されていないものの、今後継続してモデルの精緻化を進めていってほしいと思います。

文京区に限らず、社会の中で孤立している若者はまだまだたくさんいます。サンカクシャの取り組みは、これまでの若者支援の活動とは一線を画す若者目線・若者本意の活動になるポテンシャルを秘めていると感じています。社会との接点を増やしつつ、社会を変えていく活動を今後も展開していくほしいと思います。伴走支援者としての役割は今年度で終了しますが、今後もサンカクシャの活動を応援していきたいと思っています。





土田 毅(つちだ たけし)

株式会社 WACUL 所属コンサルタント、マネージャー。  
BtoB、BtoC 企業のウェブマーケティングの戦略策定と実装支援及び社内のチームマネジメントを行う。

2017年より NPO 法人 OVA で事務局として勤務。  
自治体委託事業の企画・営業・運営、社会福祉に関わる法人向けのウェブマーケティング活用事業の立ち上げ、日本財団助成事業の運営、ファンドレイジング・広報を担当。  
2020 年より現職。

#### ・伴走内容の総括

本年度は伴走支援者として、文京区事業の円滑な推進に向けて、事業内容の定期的な振り返りとそれに基づいた次のアクション策定の支援を担った。  
月次の定例会の中で共有される事業進捗や実施内容に対して、その目的の確認や重要な論点の整理、目的達成のために取りうる打ち手の提示を行った。  
また、別途事業結果の言語化や示唆だしに関しては現場担当者と個別に打ち合わせを行い、現場レベルでの整理も支援している。

#### ・1,2年度との差異

アウトリーチ手法開発という各論部分を中心に取り組んだ 2 年間と異なり、事業全体の進行を現場メンバーの支援を中心に進めてきたことが大きく異なる点としてある。

事業自体の担当メンバーが変わった中で、事業の位置づけの再確認、目的と目標のすり合わせ、事業によって示したい仮説作りの支援、事業から得られた示唆の振り返りを通して全体推進をサポートした。



2019 年 5 月 24 日 NPO 法人サンカクシヤ設立

2019 年 豊島区と文京区で若者の居場所開設、企業と連携した社会サンカクプログラム実施開始

2020 年 居住支援を開始  
北区拠点にて居場所開設  
社会サンカクプログラムの一環で 1 年限定カフェ運営

2020 年 8 月 カフェ Daisybeans オープン、職業訓練スタート

2020 年 11 月 跡見女子学園大学板東ゼミとの連携開始

2021 年 8 月 カフェ Daisybeans、本郷の居場所が終了

2021 年 8 月 社会サンカクプログラム「イツショニバイト」開始

2021 年 9 月 千石へ移転

2021 年 10 月 社会サンカクプログラム「サンカククエスト」開始

2021 年 10 月 千石での居場所を開設

